

不登校児との遊びを通しての交流と、その分析

斎藤 崇・海塚 敏郎

(受付 2000年5月10日)

<序 文>

不登校は思春期における大きな問題として近年取り上げられている。わが国における現在までの不登校の推移は昭和41年度に小学生の全児童数約九千五百万人に対して、0.05%の割合であり、その後1980年代前半まで減少傾向にあったが、80年代末から再び増加傾向を示し、平成2年の段階で小学生において全児童数の0.09%になり、現在も増加の一途をたどっている。特にここ数年子どもの数は減少傾向にあるにも関わらず、不登校と判断された子どもの数は増加しつづけている。また、文部省によって発表されている数は氷山の一角であり、保健室登校なども含めるとその実態はその30～40倍になると考える人もいる。文部省も不登校は特別な出来事ではなく誰にも起こり得るものであるとの発表をしている。

その不登校の定義は研究者により様々であり「学校に行かないという現象を持つものを不登校といい、病気療養、経済的理由で登校できないものとか就業している生徒を除く」(清水, 1979) というものや行動パターンレベルから捉え「基本的には、家庭—学校—家庭という往復パターンが家庭で停滞し、断続してしまった状態」(小林, 1980) というものなどがある。また、稲村(1980)は既存の諸定義を総覧し「学校に行かない現象すべてを含めるべき」として「それを内容にしたがっていくつかのタイプに分けて用いる」のが良いと述べている。しかし不登校という用語に関しても違和感や抵抗が残り、「これまでの登校拒否に関する研究が、研究に初期において慎重に弁別した類型を、不登校という不鮮明な用語を使用することによってかえって曖昧になることを懸念」(鏑, 1989) という意見もあるが、

現在ではおおむね受け入れられてきている。

不登校の原因論については、日本では多次元的な捕らえ方が一般的であり、様々な研究者によってその原因が挙げられているが、全体として共通するのは、①急激な社会変動、都市化による環境に変化と遊びの消失 ②核家族化と過保護 ③マスメディアの発達による価値観の分散 ④学校のあり方の問題、能力主義、詰め込み教育の弊害 ⑤個人の性格上の問題などが挙げられる。現在ではこれらの要因が複雑に絡み合っているケースが多く、短絡的に原因の限定を行うことが困難になっている。最近では学校内におけるいじめ、対人関係、他者とのコミュニケーション不足などとの関連から検討されることも多い。

治療のアプローチに関しては、過去においては精神障害の一種としてみなし、精神科医による薬物投与を行うことが主流であった。しかし、近年では不登校の原因が多様化して、対人関係の結び方がわからない、家庭内での分離不安などの原因も増加しているためにカウンセリングによる不登校の治療も幅広く行われるようになってきている。その手法としては遊戯療法や箱庭療法に見られるように、クライアントに何かの作業を行わせることによって、クライアントの心の動きを読み取り適切な方向性を示し人格の統合、問題行動の軽減を狙うものがある。しかし、これらの多くは特定の場所に親や子どもが出向くことによって始めて成立するという問題点があり、その場所まで行くことができない子どもなどの場合は親のみの面接になり効果がなかなか出てこないということも指摘されている(長坂, 1997)。

この点を解消するために訪問面接という形がある。その方法は治療者が訪問を行い、場所と時間の設定を緩やかにして、場所は子どもの家だけではなく、近くの公園やコンサート会場への同行なども行う、時間に関しても2, 3時間から丸一日というように幅がある。平尾ら(1972)もクライアントは「言語よりも行動による自己表現」を取りやすく、カウンセラーも「行動に具体的に働きかけたり、応じたりする」ことに意義を認めてい

る。この柔軟性が利点であると共に、面接自体を破壊してしまう可能性も持つためその適用には注意が必要である（長坂，1997）。

最近では治療という観点ではなく支え役になるという考え方から専門家以外の人間との関わりによって家にこもっている子どもとの交流を行うという方法もとられていることが多い。

このような観点から考えると不登校へのアプローチは積極的に子どものもとに出向き、様々な人によるネットワークを用い、治療チームを形成しうまく活用していくことが重要であると考えられる。

本事例においては子どもの家に訪問し、非専門家としての立場から遊び相手として子どもと関わった、その経過を子どもの変化、母親の変化という観点から考察した。

事例の概要

対象児：A，X年六月の段階で12歳，小学校5年生。友人はいるが、あまり仲良く遊ぶということはない。性格はやさしいが人づきあいは苦手。

家族構成：父親，母親（30代後半），2歳年下の弟（X年6月の段階で小学校4年生）。

父親は貿易関係の会社に勤務，海外に出張することが多く。家にある書籍から多趣味であると思われる。直接面識を得ることはなかったが，電話での応対から判断すると快活で人当たりのいい印象を受けた。母親は専業主婦で，講演会などにも積極的に参加する積極性を持ち，人当たりは良い。弟は人懐っこく，小柄，元気はあるが，外出や遠出をすることはあまり好まず，どちらかというとき家の中にいることを好む。

訪問の経緯

Aが学校を休みがちになったのは小学校2年生からであり，本格的に行かなくなったのは小学校3年生のときからである。そのきっかけは，運動会のときに教師に無理矢理集団ダンスに参加させられたためであるらしい。そ

の後は学校にほとんど通学せず、10日に一度午後から通学することがあるぐらいということであった。

小学校5年生になってから区のケースワーカーが毎週訪問していたが、登校しだしたことを機に訪問を終了したところ、また登校しなくなった。きっかけはやはり運動会である。その後、家にこもっていることが多く、他者との接触がまるでないために、遊び相手として筆者が週に一回訪問することになった。

訪問過程

訪問はX年6月よりX年+1年10月までの約1年4ヶ月、35回。途中夏休みで1ヶ月の中断がある。

なお各セッションを変化があった期ごとに5期に分ける。

第1期（#1～#8）：筆者の存在に対するAの不安感、ためらい

#1 はじめて家に行った際、母親がドアを開けてくれ、Aの姿は見当たらなかった。Aがどこにいるのかを母親に聞いたところ、自分の部屋にいるとのことだった。挨拶をしたいということを母親に話して、Aを居間に呼んでもらったが、部屋から出てきたAは落ち着きなく居間の中を歩き回り、視線は下を向き、話すきっかけをこちらに作らせてくれなかった。母親を間にたててお互いの自己紹介をしたが、この間も体が小刻みに揺れて、正面を向くことがなかった。その後Aは部屋に戻り、ついていったがドアが閉まっていた。ノックしてしばらく待っていると、ドアを開け中に入れてくれた。

部屋に入ると中はかなり汚れ、畳の切れ端や紙の破片、その他いろいろなものが落ちていて座るところもなかった。Aは部屋の隅に座りテレビゲームをしていた。Aはこちらを完全に無視しゲームを黙々と続けていた。こちらが近づくと離れ、隣に座ろうとすると場所を移動してしまう。天気のことや、最近のテレビ番組のことを話してみても反応がなかった。この後、

話題がゲームのことになると反応するが、Aからこちらに話しかけてくることはなかった。食事のときも母親が間に立って会話を進めるという形が続いていた。

2 訪問した際は部屋から出てこないが、部屋に入る挨拶をすれば返事が返ってくる。しかしそのとき視線はテレビのゲーム画面から動かない。話しかけても、ああ、とか、うんとかという反応だけで、会話にはならない。途中母親が部屋に入ってきて、Tに向かって聞きたいことがあるんでしょとAに言ってきた。結局、Aはうつむいているだけで、母親が質問してきた。途中Aは母親に急き立てられてパソコンのことで聞きたいことがあると、部屋にあるパソコンの前に座った。椅子が一つしかないため、椅子をもう一つ持ってきて隣に座ろうとすると、Aは立ち上がりTの後ろに立ち、そこから画面を見るようにしていた。その後、パソコンのことを話したがこの時は別人のように一方的に喋り、こちらから何か言う間がなかった。また、話す内容も一方的に切り替わり、会話をしているという感じは受けなかった。

終了後次の予定を決めるときAは自分の部屋に戻ってしまい、母親と日程を決めることになった。

3 家について呼び鈴を鳴らすと母親が返事をして、ドアを開けてくれたが、A君も一緒に部屋から出てきて挨拶をしてきた。その後一人で部屋に入ってしまったが、後について部屋に入ると、Aから話しかけてきた。

<そのときの会話>

A：新しいゲームを買った…

T：何を買ったの？

A：侍スピリッツ

T：面白い？

A：けっこう…

会話はこの程度のもので短かったが、新しく買ったゲームを二人でしている時何かの拍子にAがかすかに微笑を見せた。その後部屋の雰囲気は少

し和やかになり、こちらの存在を少し認めてくれたように感じた。今回はAのほうから話しかけてくるが多かった。内容は終始ゲームとパソコンのことで、興味のないことをこちらが話しかけるとまったく反応はなく、Aの知っている事をこちらに話しているという感じを受けた。

その後の#4から#6のセッションも同じような状態が続き変化はなかった、穏やかな雰囲気になってきているように感じた。しかし、母親がいるところではAに話しかけても、母親が仲介してしまい、Aが自分で話してくるということはなかった。

#7～#8 夏休みの間は弟が家にいるのでセッションを中止して欲しいという母親の要望で、2ヶ月ぶりのセッション再開になった。家に行くといつものように母親が出迎えてくれるが、Aはこちらの姿を確認すると何も言わずに自分の部屋に戻ってしまった。部屋ではいつものようにゲームを一人でしていた。床においてあったゲームの箱を取ろうとすると、その箱をぱっと取り上げて、そのゲームの説明をし始めた。自分の所有物を触られることに対しては抵抗があるように感じられた。会話はまったく進展せず、何も話さない沈黙した状況が続いてしまい、Aは体を小刻みに揺らして、落ち着きがなくなってしまった。毎回のセッションの予定も母親と二人で決めてしまい。訪問の初期の状態に戻ってしまった。

第2期(#9～#14)：筆者に対する信頼感の芽生えと、登校のあきらめ

#9～#10 この時期は家で二人でテレビゲームをして、食事をとってまたゲームをするという形が中心になっていた。しかし、ゲームをしながらも会話は行われるようになり。視線も合うようになってきた。また、会話の中で友達と遊んだことなどもでてきて、日常生活に広がりが出てきているようであった。#10セッションから、家に行った際Aが出迎えるようになり、こちらに対する構えもさほど感じられなくなってきた。部屋もきれいになっていて、そのことをAに話すと、自分で掃除をしたと照れくさそうに笑っていた。また、近々学校で修学旅行があるらしいが本人は表面

的には興味がないようだった。

#11セッションでAから頼みがあるところに対して話しかけてきた。

A：頼みがあるんだけど…

T：なに？

A：無理ならいいんだけど

T：言ってみなよ

A：連れて行って欲しいところがある

この後母親が話しを引き継いでしまったが、イベントがあり、その付き添いに言って欲しいということであった。セッションの時間外であったが、最近、Aはまったく学校には行っておらず、部屋からもほとんど出ないということを事前に母親から聞いていた。また、Aの母親への言動が非常に攻撃的になっていることから外に出ることによって、外界との接点を作ればいいとの考えから、承諾した。当日の打ち合わせが本人とできればと思いきやAが話してくるのを待っていたが、結局母親が代わって話してしまった。

#11～#14 この時期のセッションから、Aと外で遊ぶ機会が出てきた。きっかけは雑談の中でAが昔フリスビーをやったことがあり、結構得意ということだった。

外に出て遊んでみると、動きは活発で表情も豊かになった。しかし、人が通りかかると動きが止まり、こちらに時間はまだ平気かと何度も聞いてきた。やはり、他人の目が気になるらしく、最初の外での遊びは30分程度でやめることにした。この後からは家から離れたところに外出するということが増えた。外出時母親を介在して会話するということがなくなり、一対一でのコミュニケーションになり、会話に自発性が出てきた。そのことは家でのセッションでもみられるようになった。しかし、この時期から部屋がまた汚れだし、母親に対しての攻撃的な言動も続いていた。また、弟に対しても些細なことで暴力を振るってしまうらしい。

第3期(#15～#20)：Aの進学への不安と破壊的行動の増加

この時期から中学校進学を控えての不安からか、勉強がわからないという事をもらすことが増えた。しかし、やればわかるし、人よりは記憶力があるからと言っている。もしA君がそうしたいなら少しなら勉強を教えることができるということをこちらが言うと、言葉を濁してしまう。勉強の遅れは不安であるが、実際勉強を始める事にはためらいがあるように感じられる。将来就きたい職業などの話もしなくなり。髪をかきむしる、体を揺らすなどの行動も多くなっている。

#21～#24 この時期にAは中学校に進学した。入学式には参加せず、まったく教室にも行っていないということだった。話す内容などは今までと変わりがなく、テレビゲームのことが中心である。部屋の中に入ると壁に何ヶ所か穴があいており。母親に聞くと、ゲームをしていてうまく進まないといつ当たり壁などを殴っているらしい。この時期一時的に弟も学校を休みがちになり、二人でいることが多くなっていた。弟は高学年になり授業に就いていけないことが原因であるらしかった。しかしこの後、また弟の登校は再開された。

第4期(#25～#28)：社会に対する希望と自信

夏休みを一月後に控えたこの時期からAはフリースクールに通いだした。普通の学校とは違い出席数などもなく、自由に時間を使うことができるということであった。これまではセッションのない日にフリースクールに行くという形をとっていたが、徐々にフリースクールの行事などのためにセッションが中止される週がでてきた。セッション中特に学校での話を自分でしてくることはないが、母親が学校での行事のことをAに振ってくるとうれしそうな顔をしながら学校での出来事を話してくる。また、学校への登校のことを気にしてゲームを購入する本数も減ってきているらしい。雰囲気も穏やかになり、ゲーム以外のことも会話の中に上るようになり、以前からあった人に対する拒絶的な態度も減少してきた。

夏休み前の最後のセッションでは夏休みは少し勉強もしてみようと思うと本人の口から聞いた。セッションの内容は二人でテレビゲームをするという形が中心ではあるが、外出に対する抵抗はなくなり家よりも外のほうがよいということを言うようになった。

第5期（#29～#35）：安定、自信の増加

夏休み後最初のセッションの日時を決めるために電話し、その際Aと話す口調に落ち着きがでて、受け答えも今までのような曖昧なものではなくはっきりしていた。家に行ってみても、部屋はきれいに片付いており。本人の容姿は髪が長く、服装もラフであるが、清潔感があり、態度にも落ち着きがでていた。会話にも余裕があり、人の話も落ち着いて聞けるようになっていた。部屋に二人でいるときも隣に座っても平気になり、横で雑誌を読んでも取り上げることもなく一緒に見ることができるようになった。フリースクールにも週に二三日通えるようになり、そこで友達も出来て、家の行き来もあるようであった。しかしこの時期も部屋の壁に穴をあけるといようなことがあるらしかった。セッションは外に出かけることが増えた。一度車で都内の遊園地に二人で行くことがあったが、車の中でも体のゆれやチックも起こらず、リラックスしているようであった。途中Aが通っているフリースクールの場所を教えてくれたり、学校までは遠いけど、最近はがんばって通っているということを話したりしていた。目的地に着くと、今度は友達といっしょに行ってみるといことを言っていた。

#36以降

その後、週一回の訪問は三ヶ月続き終了した。Aは中学を卒業した後高校へは進学せず。アルバイトなどをしながら生活している。

＜考 察＞

Tとの間の対人関係の変化

第1期

目線を合わせない、隣に座られることを拒むといった形でこちらと関係を持つようとすることを拒否しているという態度が強く感じられた。話し掛けても返事も返ってこないセッションもあり、チックが現れることも多かった。依然、不登校になった際ケースワーカーが毎週訪問していたことがあったということから、また不登校をきっかけにして見知らぬ人間が家にきたということから、嫌悪感や不安感がかなりあったことも考えられる。Aにとってこの時期自分が安心できる場所は自分の部屋だけであり、その場所への侵入者と感じたのかもしれない。

第2期

第一期のようにこちらとの関係を会えて断ち切ろうとするようなことはなくなったが、話すことはゲームやパソコンのこのみであり。自分の考えをこちらに話すだけであった。これは反論されることへの恐怖と今まで家族以外の人間と話すことがなかったためであるように思われる。また、こちらに頼みごとがあるときなどは母親を仲介して自分は前面に出てこない傾向がある。これらのことは積極性の欠如や依存的であるという本人の性格特性によるところよりは、過去に経験してきた学校での教師との対応や友人から受けた態度から導き出された本人なりのコミュニケーションの形であると考えられる。しかし、他人と時間を共有することはできるようになってきている。

第3期～第4期

この時期から二人の関係は安定したものへと変化してきている。会話もそれまでの一方通行的なものでなく、自分の考えを自分で言えるようになって

てきている。居間まで母親が存在することによって安定していた関係が母親がいなくても成立することが可能になり始めた。このことはこちらとの関係に対して安心感を持ち始めたためであると考えられる。

今までは試行錯誤の時期であり、二人の関係がどのように変わっていくかお互いに不安があり、セッション中感じていた焦りなどがなくなってきてセッションに時間を十分に楽しめるようになってきた。しかし、これ以上の発展性がみられなくなってきた。

第5期

お互いに無理に対等な立場になろうとする焦りや、相手に対する過度の気遣いがなくなり、そのままに関係を受け入れられるようになってきている。

母親の対応の変化

第1期～第2期

母親は様々な不登校の文献を読み、ケースワーカーにも積極的に相談して、不登校児に対する対応を一通りは知っているらしく。最近はすべてを受け入れることにしたと話していたが、「私はどうでもいいのよ、あなたのことだから関係ない」というように受容するということが子どもを突き放すという言動に結びついているように感じられた。他に、Aが口籠もっていると代わりに自分で話してしまい、Aが考える暇を与えない事が多く、Aの自立を妨げている一因になっているように感じられた。また、登校刺激を与えることはないみたいだが、登校している状態が普通であると考えて、Aも登校するようになってくれればもっとよいという強い願望を持っていた。

第3期

やはりAが何かをこちらに話そうとしてためらっていると、代わりに話

してしまうという傾向が続いている。しかし、Aに対する不自然に突き放す態度は減少してきている。学校に登校するということに関しては漠然としたあきらめがでてきて、Aがとりあえず生き生きと生活していればそれで良いということを感じていると話してきた。またAがこの時期色々な習い事に通うようになり、それはAが自発的に言ってきたもので、Aも外に出たがっているのだということを書いてきたが、これも母親が色々なパンフレットなどを持って来るからで、Aは目に見えない親の期待にこたえるために習い事に行くという一面があるように感じた。

この時期の終わりのころ、Aの中学進学が近づいてくると、環境が変わるからAも学校に行くのではないかという期待がわいてきて、こちらにもそのことを話してくる。

第4期～第5期

この時期Aはフリースクールに通うようになり、母親は非常に喜んでいて、しかし、フリースクールでは勉強はしなくてもかまわないということで、Aは勉強の時間には学校にほとんど行かないため学力の遅れが心配だということを書いていった。

Aがフリースクールに通い始めて半年程度過ぎたころ、フリースクールで懇親会があり、担任と話したとのことだった。その際、担任にとりあえず授業は受けていなくても学校に行くことができれば良いという趣旨のことを言われて、それが不満で学校を代えたいということを書いてきた。

<母親の変化の総合考察>

全体として、子どもが登校してくれればという期待が強く、頭では受容しなければいけないと考えながらも「せめて～してくれれば」という期待的発言が入り込むことが多かった。この母親の期待を子どもが敏感に察知して何とか応えないといけないと考え、そのことが負担になり自分の部屋以外では耐えられず。自分の部屋のゲームの世界に逃げ出しているという

感じを受けた。

また、昼間はAと接する時間が多く、いつまでもAの幼いころのイメージが残っていて、Aが自分の期待通りに行動してくれるのではないかという期待があるように思われる。

<総合考察>

1. Aの不登校の発生機序

Aは小学校3年生のとき運動会の練習で一人だけダンスができていないということを教師に注意され、それをきっかけに学校への恐怖と不信感が強くなり不登校が始まった。もともと友人関係においても積極的に関係を持つようとする子どもではなかったため、対人関係においても同年代の子どもとの接触がなくなり、それからほとんど家にいる生活になってしまった。

以前ケースワーカーが週に一回の訪問を行い、そのとき一度再登校をするようになったが、訪問が終了すると同時に再び不登校を始めたという経緯があった。これもAの性格特性として甘えが強いという解釈も可能であるが、ケースワーカーに家で会うことが非常な負担であり、唯一心が休まる家での生活が行えなくなり、その代償として家から逃避する形で登校が起こった解釈できる。これもAが潜在的に持ちつづけていた、「他者に非難され拒否されている」という対人関係の認知に根ざしていると考えられる。

2. 遊びを仲介することの意義

本事例においては、遊びを通して子どもとの交流を図ったものである。遊びの持つ機能として遊びを通して子どもは創造性を育み、人格の統合を目指す。本事例においても遊びを通してAとの間に関係を作り、発展させてきた。遊びとは本来打算的ではなく、遊びという行為自体が目的となっている。そのため、遊びは純粹に相手とのコミュニケーションをとるための手段となるうる。

また、本事例のセッション#3の中でAに笑いがでた後、非常に雰囲気

が和やかになった。笑いは過去の経験から対人関係が不快なものとして偏って認知されていたものを断ち切る手段となりうる。吉良 (1994) はくつろいだ雰囲気の中で即興的に生じる笑いは常同化した体験を緩め、豊かな連想や行動への活力を生み出すことにつながると述べている。また Gendlin (1964) は「何を体験しているか」という体験内容 (content) だけではなく「どのように体験しているか」という体験の様式 (manner) に目を向ける必要があるとし、体験様式に変化が生じることによって体験内容にも変化が生じることを指摘している。本事例においても、家もしくは外で二人で遊ぶという体験内容に関しては変化がないが、遊びを共同作業として共に楽しむという形に体験様式が変化したことによってAの過去の経験から導き出された不快な対人関係の認知に変化が起こったと考えられる。今回の場合、遊戯療法とは異なり媒介となるものがテレビゲームであった。テレビゲームについては攻撃性を助長するなどの非難も多いが、対人関係を促すための手段として抵抗なく用いられる点で利点があった。しかし、その反面二人でゲームをするということから発展しなかったということが非常に残念であり、今後の検討課題であると感じた。

謝辞

本事例を論文にすることを快く承諾していただいたA君とそのご家族および関係者に感謝の念を表します。

*本論文は専修大学文学部人文学科心理コース平成7年度の卒業論文に加筆修正を加えたものである。

文 献

- 稲村 博 1994 不登校の研究 新曜社
岩本澄子 1996 登校拒否児の学校適応という視点からの予後予測 児童青年精神医学とその近接領域, 37 (4) 331-344
内田利広 1992 登校拒否における「親の期待」に関する一考察 心理臨床学研究, 第10巻, 第2号 28-38

斎藤・海塚：不登校児との遊びを通しての交流と、その分析

- 小野 修 1993 不登校児の親の変化過程仮説—パーソンセンタードアプローチ—
心理臨床学研究第10巻, 第3号 17-27
- 小野昌彦 1997 不登校の研究動向—症状論, 原因論, 治療論, そして積極的ア
プローチへ— 特殊教育学研究, 35 (1) 45-55
- 吉良安之 1994 自責的なクライエントに笑いを生み出すことの意義 心理臨床学研
究第11巻, 第3号 201-211
- 竹松志乃 1994 チック・強迫症状を呈した中学生男子の事例 心理臨床学研究第12
巻, 第3号 239
- 土居健朗 1991 専門性と人間性 心理臨床学研究第9号, 第2巻
- 三木 都・深津千賀子 1993 登校拒否から来院拒否へ 心理臨床学研究 第12巻,
第3号
- 水田善次郎 1994 登校拒否児に学ぶ ナカニシヤ出版
- 長坂正文 1997 登校拒否への訪問面接—死と再生のテーマを生きた少女— 心理臨
床学研究第15巻, 第3号 237-248

Summary

The Analysis of the Play with a Child with no School Attendance

Takashi Saito and Toshiro Kaizuka

This paper is a case study of a child with non school attendance. As a specific point, the therapist visited the child, played with him. 35 sessions were held during a period of 1 year 4 months. Concerning the place and the interval, visiting were kept flexible. In visiting, the child was embarrassed with the therapist, but before long, the relation between therapist and him became to stable and friendly. In each session, Getting contact with surroundings by means of playing, and the unpleasant person perception seems to reduce. That tendency was notable accompanied with his laughing in playing. During the visiting process, the child go on to junior high school and “free school”. The experiences gave him self-confidence. At the same time, the therapist carried out the interviews with his mother. She was puzzled about him for non school attendance at first, but changed to accept the present situation.